

# 米国の音楽療法士養成教育に関する一考察

## —『テンプル大学音楽療法教育研究』(1987, 1988)を中心に—

安宅 智子

(本講座大学院博士課程後期在学)

### I. 研究の背景と目的

米国では、ミシガン州立大学が1944年に初めて4年制の音楽療法士養成課程を設置した。当時の音楽療法士養成教育は、各大学の独自のカリキュラムに沿って行われていた。この養成課程の設置は、音楽療法士の全米組織の設立を促す一因となり、1950年にはNAMT (National Association for Music Therapy) が設立された。そして1952年にはNAMTの教育部会が、音楽療法士養成カリキュラム (以下、1952年版NAMTカリキュラム) をNASM (National Association of School of Music) に提出し、承認を受けた。このようにして、養成教育は、NAMTの提示したカリキュラムを指針として、各認定大学が定めたカリキュラムに沿って行われることになった<sup>1)</sup>。NAMTは、1960年代ごろから当時の心理学の潮流であった行動心理学に注目し、音楽療法を行動科学と捉え、音楽療法の科学的側面を重視することとなる。これにより米国の音楽療法における量的研究は発展することとなり、音楽療法士養成教育においても行動科学が重視され、結果的に音楽的側面が軽視されることとなった。このような中、NAMTとは別の方向性を示す全米団体として1975年にAAMTが設立<sup>2)</sup>されることとなる<sup>3)</sup>。AAMTはNAMTのカリキュラムに相当するものとしてコンピテンシーを作成し、その内容は音楽的側面を重視した内容であった。また、大学院レベルの音楽療法士養成教育にも力を入れていた。このように、両協会はそれぞれの個性をもって23年間別々に活動するも、1998年にはAMTA (American Music Therapy Association) として統合され、現在に至る。

音楽療法士養成教育は、NAMT設立当初から音楽療法界全体の関心事の1つであり、多様な研究がなされてきたが、AAMTが設立されてからは当然のことながら協会内における音楽療法士養成教育の研究が盛んであった<sup>4)</sup>。そのような中、1980年代後半に全米規模で行われた音楽療法士養成教育の研究として、*Temple University Studies on Music Therapy Education* (『テンプル大学音楽療法教育研究』以下、本書) があげられる。これは、1985年から1986の2年間、テンプル大学の研究基金の援助を受けた調査研究であり、その目的を以下に示す。

- ①現時点における学問や臨床トレーニングの要件の調査。
- ②教授やスーパーヴィジョンの最新のメソッドの調査。
- ③現在の問題や、主張、流れの発見。
- ④今後の方向性、そのための準備。
- ⑤音楽療法の教育者やスーパーヴァイザーに対して用いられる書籍の作成<sup>5)</sup>。

これらの目的を達成するためにテンプル大学音楽療法教育研究では、大学の要項やインターンのマニュアルの分析、教育者、臨床家、スーパーヴァイザーに対しての全米調査、修士論文の目録の作成を行った。また、その成果は以下の3冊の本にまとめられた。

Vol.1: *Perspective on Music Therapy Education and Training* (1987)

(音楽療法士養成教育に関するトピック)

Vol.2: *Methods of Teaching and Training the Music Therapist* (1988)

(音楽療法士養成教育の全米調査の結果と考察)

本書は、MarantoとBrusciaを編者としている。Marantoは、1988年から1989年のNAMTの会長であり、音楽療法の倫理および倫理教育の第一人者でもある。一方Brusciaは、1980年から1982年にAAMTの会長を務めたほか、1981年にはAAMTの音楽療法士養成教育の指針となるコンピテンシー（職業的専門能力）を、1986年には大学院レベルのコンピテンシーを考案した。両者はともに音楽療法士養成教育に深く関わっていた。先行研究において、本書は音楽療法士養成教育に関する研究の1つとして取り上げられているが<sup>9)</sup>、本書を音楽療法士養成教育史における第一次史料として扱った研究はほとんどない。しかし、この全米調査研究の意義を明らかにすることは、米国の音楽療法士養成教育の歴史の変遷を明らかにする上で必要であるといえる。

したがって、本稿では、Vol. 1 *Perspective on Music Therapy Education and Training* (以下、Vol. 1) および Vol. 2 *Methods of Teaching and Training the Music Therapist* (以下、Vol. 2) に掲載された論文および調査の報告を中心に、その内容から本書の特徴を踏まえううえで、この全米調査研究の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。なお、Vol. 3 *Master's Theses in Music Therapy : Index and Abstracts* は修士論文の目録であるため、本稿では扱わない。

## II. 1980年代の音楽療法士養成教育と音楽療法界の変遷

前述したように、1980年代の米国における音楽療法士の全米組織は、NAMTとAAMTの2つであった。1976年には、NAMTのカリキュラムにあたるものとして、AAMTコンピテンシーが採択され<sup>7)</sup>、1981年にはBrusciaらによってAAMTの刊行物である*Music Therapy*にその内容が掲載された。また、1986年に大学院レベルのコンピテンシー（Advanced Competencies）がBrusciaによって作成され、1989年にはCMTの上級資格であるACMT（Advanced Creative Music Therapist）が誕生した。このような経緯を経て養成教育は、各協会の打ち出した指針に沿って展開されていった。また、1983年に音楽療法士認定機関であるCBMT（Certification Board for Music Therapist）が設立され、1985年には第1回の音楽療法士認定資格試験が実施された<sup>8)</sup>。この試験に合格することによって、NAMT認定大学で音楽療法士養成教育を受けた学生にはRMT-BC（Registered Music Therapist—Board Certified）が、AAMT認定大学で音楽療法士養成教育を受けた学生にはCMT-BC（Creative Music Therapist—Board Certified）が与えられた。つまり、異なる養成教育を受けているにもかかわらず、同一の試験によって異なる資格が授与されていたのである。

また同年、各協会はさまざまな芸術療法協会の連合組織であるNCATA（National Coalition of Arts Therapists Association）とともにニューヨークにて合同で会議が開催された<sup>9)</sup>。NCATAの会議にはNAMT、AAMT両協会が参加しており、MarantoとBrusciaは、この会議で音楽療法教育者たちが音楽療法の指導に関する有用な情報が不足していることを主張したことが全米調査のきっかけとなった<sup>10)</sup>と述べている。その後1989年にはNAMTによって音楽療法士養成教育に関するシンポジウム（カリフォルニア音楽療法士養成教育シンポジウム）が開催され、NAMTはAAMTの音楽療法士養成教育の、特に大学院レベルでの養成教育やインターンの在り方について評価されることとなった。したがって、テンブル大学音楽療法教育研究は、正式に両協会の統合が決まる1996年に向けた、音楽療法士養成教育における協会レベルでの接触の先駆けであったといえる。

## III. 本書の概要

### 1. Vol. 1の概要

本書は、論文集（Vol. 1）、全米調査の結果（Vol. 2）、修士論文の目録（Vol. 3）の3冊で構成されている。Vol. 1は、21のChapterからなっている。各Chapterは1人または複数で執筆されており、それぞれ音楽療法教育に関連したテーマで調査をした結果報告や、提言などが示されている。各題目と執筆者を以下の表に示す。

表1 *Perspective on Music Therapy Education and Training*の題目と執筆者

Chapter	題名	執筆者	分類
1	音楽療法教育およびトレーニングにおける論文の中で継続されているテーマ	Maranto, C. D.	
2	音楽療法教育における専門職のアイデンティティーの問題点	Bruscia, K.	①
3	音楽療法教育のための認定と承認の基準	Scartelli, J.	②
4	音楽療法教育の責務	Braswell, C.	②
5	音楽療法教育およびトレーニングにおける倫理的な問題点	Maranto, C. D.	①
6	大学の音楽療法教育課程の運営	Wheeler, B.	③
7	音楽療法学生のための文献: <i>Journal of Music Therapy</i> における臨床および学術研究の文献の分析	Decuir, A.	⑤
8	音楽療法教育におけるコンピューターへの応用	Gregory, D.	⑤
9	音楽療法インターンのためのピアノ技術の役目	Cassity, M.	⑤
10	臨床トレーニングにおける差異: AAMT モデルと NAMT モデル	Bruscia, K.	②
11	現在の音楽療法における組織と管理: 手続きの案内	Darrow, A. Gibbons, C. A.	④
12	College/University における音楽療法の臨床講義: 財政上の考察	Darrow, A. Gibbons, C. A.	③
13	コンピューター・ベースの評価作成	Wolfe, D.	⑤
14	学生の臨床実践の観察とフィードバックのテクニック	Hanser, S.	④
15	音楽療法におけるスーパーヴィジョン: 理論的モデル	Memory, B. C. Unkefer, R. Smeltekop, R.	④
16	トレーニングおよびスーパーヴィジョンのためのメソッドとしての体験的な音楽療法グループ	Stephans, G.	④
17	臨床的な広がりや芸術: 創造的芸術療法における学際的なトレーニング	McNiff, S.	⑤
18	音楽療法における教育と臨床トレーニングのための創造的芸術療法モデル	Briggs, C.	④
19	GIM のための創造的トレーニングのプログラムと音楽の設定	Clark, M.	④
20	実習生の苦悩と燃え尽き: 音楽療法士を脅かすものとは?	Glider, J. S.	⑤
21	高等教育の流れと、それが暗示する音楽療法教育	Hope, S.	⑤

表1から、Vol. 1では、音楽療法士養成教育を取り巻くさまざまなトピックを扱っていることがわかる。それらは、音楽療法士養成教育における専門性や倫理観というような①観念的な内容、各協会の養成教育モデルの比較やコンピテンシーに基づいた養成教育に対する見解というような②制度的な内容、大学の音楽療法課程の運営や養成教育における財政面というような③周辺のな内容、大学をはじめとした諸機関で行われている音楽療法士養成教育の紹介というような④実践的な内容、そしてコンピューターを用いた評価など⑤その他の内容の5つに大別できる<sup>11)</sup>。

また、執筆者の多くは大学教員であるが、施設などの機関で働く音楽療法士も含まれている。彼らの所属機関は、NAMT 認定大学が圧倒的に多く、NAMT と AAMT の両方の認定大学となっていた Hahnemann University を除けば、AAMT 認定大学は、Temple University のみである。しかし、当時の NAMT および AAMT の認定大学の数は、NAMT 認定大学が 67 校に対して AAMT 認定大学はわずか 7 校であった<sup>12)</sup>。また、NAMT 認定大学、AAMT 認定大学以外の所属機関は、NASM や音楽療法の施設、認定外の大学であった。さらに執筆者の中には、両協会の歴代の会長および AMTA の会長が、編者 2 名を含め 8 名いた<sup>13)</sup>。

## 2. Vol. 2 の概要

Vol. 2 は、9 の Chapter からなっており、NAMT および AAMT 認定大学に向けて行われた全米調査の結果報告 (Chapter 1-8) と考察 (Chapter 9) に分けることができる。この全米調査は、①音楽療法教育者に対する調査、②スーパーヴァイザーに対する調査、③音楽療法士に対する調査、④大学の要綱に関する調査の4つからなる。①音楽療法教育者に対する調査では、AAMT コンピテンシーと CBMT によって作成された知識と技能のコンピテンシーを用い、学士レベル、修士レベル、博士レベルの3つの対象にわたって質問紙調査が行われた。②スーパーヴァイザーに対する調査では、NAMT 認定大学の教員に対して作成された43項目からなる臨床実践分野のコンピテンシーをもとに各コンピテンシーの深さや広さに関する質問紙調査が行われた。③音楽療法士に対する調査では NAMT および AAMT のメンバーに対して作成された43項目からなる多様な分野を含むコンピテンシーをもとに、質問紙調査が行われた。④大学の要綱に関する調査では、NAMT および AAMT 認定大学の要綱をもとに単位数などが調査された。Maranto と Bruscia は Chapter 9 において、これらの調査結果を考察した上で NAMT, AAMT, CBMT に対して提言を行っている。なお、本稿では本書の歴史的意義を明らかにすることを目的とするため、個々の細かな調査結果については触れず、Chapter 9 のみを扱う。

## IV. 本書の内容に見る音楽療法士養成教育

前述したように、Vol. 1 はその内容から5つに大別することができ、それらは個々人のアイデンティティや倫理観に関わる内容から協会の養成教育モデルの違いまでと多岐にわたっている。さらに、Vol. 2 は全米調査をもとに、NAMT, AAMT, CBMT といった組織に対する提言を行っていることから、この全米調査研究は当時の音楽療法士養成教育の実態把握をすることや、音楽療法界の著明な人物らから発せられる養成教育の多様なトピックを提供してただけでなく、音楽療法士養成教育の基盤を構築している組織に今後の方向性を示した研究でもあったといえる。これらを踏まえた上で、Vol. 1 および Vol. 2 の内容を概観すると、その特徴として①養成教育の立場から音楽療法士の専門性に関連した言及、②量的、質的な臨床につながる養成教育内容の提示、③養成教育の立場からみる両協会の協力体制の確立の必要性の3点があげられる。

### 1. 養成教育の立場から音楽療法士の専門性に関連した言及

Vol. 1 では、養成教育という立場から音楽療法士の専門性に関わる内容が取り扱われていた。Bruscia (Chapter 2) は、音楽療法士の専門性について「音楽療法士は音楽家であるべきか、臨床家であるべきか」<sup>14)</sup> などといった音楽療法士のアイデンティティに関わるような対極的な2つの内容を含んだ問いをいくつか示した上で、それらの問いについて過去から現在までにどのような議論がされてきたのかを紹介している。それらを踏まえた上で Bruscia は、①各々の矛盾を解決する方法は、両極の間で適切なバランスを見つけることであること、②音楽療法は矛盾を抱えた多面的なアイデンティティを有していると認識すること、③アイデンティティの問題から生ずる教育的問題は、学士課程、修士課程、博士課程といった異なるレベルに即したアイデンティティを打ち出すことによって解決されることが最善であること、④音楽療法士養成教育は、市場におけるその時の需要や実践とは関係なく、まず第1に音楽療法分野における十分な知識を生徒に与えるということに関心をおくべきである<sup>15)</sup>と述べた。

### 2. 量的および質的な臨床につながる養成教育内容の提示

Vol. 1 では、NAMT 認定大学である University of Kansas の取り組みが、Darrow と Gibbon (Chapter 11) によって、また AAMT 認定大学の New York University の取り組みが、Stephans (Chapter 16) によって紹介された。Darrow と Gibbon は、学生が学内トレーニング時に行う臨床実践の際の手順を示しているが、臨床実践はクライアントの行動変容を目的としていることから、行動観察が全体的に強調されている。彼らはアセスメントを行う際にクライアントの音楽的スキル (①声の反応、②リズム反応、③聴覚的弁別) と、個人的なスキル (①自己の組織化、②他人との関わり合い)<sup>16)</sup> という2つの行動を評価尺度として示しているほか、クライアントや自身を評価するための評価表を紹介している。また、臨床実践のフィードバックについては紹介を必要最小限にとどめているものの、Hanser (Chapter 14) によるフィードバック

がより具体的な内容であると紹介している。Hanser によって紹介されたフィードバックとは、臨床現場における学習の転移を目指すために、ビデオテープやチェックリストを用いて学生の行動を測るというものである。

Stephans は、New York University における音楽療法士養成教育の必修の1つである集団での音楽療法体験を紹介している。ここでは、トレーニング・グループと、スーパーヴィジョン・グループという2種類の集団における音楽療法体験について述べられている。トレーニング・グループとは、学生が主に即興演奏による集団音楽療法体験をとおして、自身の内面や音楽的な変化を細かく記録するというものである<sup>17)</sup>。スーパーヴィジョン・グループとは、スーパーヴァイザーを養成する際の音楽療法体験であり、さらに上級者向けの Advanced Supervision が存在する。また、Clark (Chapter 19) は、AAMT 側の主要な音楽療法の1つである GIM (Guided Imagery and Music)<sup>18)</sup> の音楽療法士育成のプログラムの概要を紹介している。

Vol. 1 で取り上げられた臨床実践は、University of Kansas の取り組みのような客観的な立場から臨床を解釈しようとする量的な臨床実践と、New York University や GIM の取り組みのような主観的な立場から臨床を解釈しようとする質的な立場の2つに分けることができる。この2つの立場は、音楽療法に対して科学的側面を強調した NAMT と音楽的側面を強調した AAMT の臨床傾向に当てはまる<sup>19)</sup>。Maranto と Bruscia は Vol. 2 の考察において、各協会の資格委員会、教育委員会、トレーニング委員会は、それぞれの協会の中でより多くの様式を統合するよう努めなくてはならない<sup>20)</sup>と提案していることから、多様な臨床手法を採用する必要性が主張されたといえよう。

### 3. 養成教育の立場からみる両協会の協力体制の確立の必要性

Vol. 1 では、NAMT と AAMT の養成教育モデルの比較や、コンピテンシーに基づいた養成教育に関する制度面に注目した内容が掲載されており、特に両協会の制度を比較している内容に関しては、両者の協力体制の確立の必要性を指摘するものであった。

Scartelli (Chapter 3) は、NAMT と AAMT の各々の認可基準を紹介する中で、1985年に CBMT によって実施された資格認定試験によって、音楽療法士養成教育やトレーニング基準は客観的な方法で一体化または標準化され始めた<sup>21)</sup>と指摘した。つまり、認定大学になる上で各協会から要求される内容は異なるものの、同一の認定試験を受験するという事で音楽療法士養成教育の内容は CBMT の試験内容に引きつけられていったといえる。Scartelli は、そのような状況を踏まえた上で、NAMT と AAMT の教育基準に柔軟性を持たせることの必要性を主張している<sup>22)</sup>。

Bruscia (Chapter 10) は、AAMT と NAMT の臨床トレーニングの差異について明らかにしており、いくつもの方向性に違いがあることから、両協会の臨床トレーニングモデルを調和させることは不可能であると述べている<sup>23)</sup>。しかし一方で、両協会の臨床トレーニングについての実験的な研究がほとんどされていないことを指摘しており<sup>24)</sup>、両協会が共同スポンサーとなって臨床トレーニングに関する実験的な研究が行われる必要性を指摘している<sup>25)</sup>。NAMT と AAMT の協力体制の確立の必要性に関する指摘は、Chapter 2 においても「NAMT、AAMT そして CBMT が協力して、10 箇年計画で修士レベルの資格認定を行うべきである」<sup>26)</sup>という形で示されている。

さらに Vol. 2 の考察の中でも、编者という立場から Maranto と Bruscia はともに、両協会が互いの養成教育を評価し合うことに加え、CBMT も含めて音楽療法士養成教育を行うことを提案している<sup>27)</sup>。このような提言の背景として、CBMT や AAMT によって示されたコンピテンシーが高度であると全米調査によって明らかにされたことがあげられる<sup>28)</sup>。音楽療法士に要求される職業的専門能力が高度であり、それを獲得するのが難しいという状況に対して、Maranto と Bruscia (Vol. 2) は音楽療法士養成教育を2つのレベルに分けて行うこと、具体的には修士課程での養成教育の必要性を主張した<sup>29)</sup>。

## V. 全米調査研究の歴史的意義

以上より、全米調査研究の歴史的意義を考察する。全米調査研究の行われた1980年代は、NAMT、AAMT の全米組織がそれぞれの方向性を明確に保持している上で、臨床実践や研究、そして養成教育が行われていたといえよう。しかし、1985年に音楽療法士の資格認定機関である CBMT によって実施され

た資格認定試験は、異なる音楽療法士養成教育を行っていた NAMT と AAMT それぞれに協会認定資格を授与するものであった。そのような中、音楽療法士養成教育の現状把握や今後の方向性を模索する必要性に応えたものがこの全米調査研究であった。

本書の Vol. 2 で示された全米調査結果を通じて、Maranto と Bruscia は、現在の音楽療法士養成教育では CBMT および AAMT のコンピテンシーを十分に満たすことは難しいと結論付けた。そこで彼らが提案したのは両協会や認定機関の協力体制の確立の必要性和、大学院レベルの音楽療法士養成教育の充実であった。Bruscia は、本調査研究の編者の 1 人であり、大学院レベルの音楽療法士養成教育の必要性を主張する人物でもあったことから、執筆した各 Chapter において大学院レベルの音楽療法士養成教育の必要性を訴えており、個人的見解ともとれる。しかし、全米調査の考察部分において大学院レベルの音楽療法士養成教育に触れていることを鑑みれば、養成教育内容が飽和状態と化した音楽療法士養成教育に対する、全米調査研究からの提言といえよう。

また、Vol. 1 では NAMT 認定校である University of Kansas の量的なアプローチによる養成教育と AAMT 認定校である New York University の質的なアプローチによる教育が紹介されていた。前者は臨床をより正確に客観的に捉えるための訓練であり、後者は自己の内面をより深く探求するための訓練であった。音楽療法士養成教育の量的側面、質的側面の両方に着目したことは本調査研究の注目すべき点であり、これは量的研究と質的研究が互いを補うものとして存在する現在の米国の音楽療法の在り方と重なるといえよう。

したがって、テンプル大学音楽療法教育研究は、両協会共通の認定資格試験の実施という背景を受けての調査研究であったが、単に全米で行われている音楽療法士養成教育の諸相を明確にただけではなく、音楽療法士養成教育という立場から両協会の統合への方向性を示すものであった。

## 註および参考文献

- 1) NAMT の歴史については、Boxberger, R., "A Historical Study of the National Association for Music Therapy", Ph. D. dissertation, University of Kansas, 1963. を参考にした。
- 2) AAMT の前身として 1971 年に UFMT (Urban Federation for Music Therapists) が発足しており、1975 年に AAMT に改称しているため、1975 年を AAMT 設立とする。
- 3) UFMT 設立に至った背景として、先行研究では、New York University の音楽療法士養成カリキュラムが NAMT に受理されなかったこと (Solomon (1985), Robbins (2005)) や、NAMT の行動療法的なアプローチに反発したこと (岡崎 (2002), 筒井 (2002)) などがあげられている。
- 4) Braswell (1979), Greenfield (1980), Alley (1982) などがあげられる。
- 5) Maranto, D. C., Bruscia, K. (Eds.), *Temple University Studies on Music Therapy Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, 1987, p.V.
- 6) Kim (1981), 羽石 (2003), Jenson & McKinney (1990) などがあげられる。
- 7) American Association for Music Therapy, op. cit. 2008, p.58.
- 8) Ibid.
- 9) Ibid.
- 10) Maranto, C., Bruscia, K., "Purpose and Design of Study", *Temple University Studies on Music Education, Volume two, Methods of Teaching and Training the Music Therapist*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1988, p.1.
- 11) Chapter 1 は、序文的な扱いであったため、含めなかった。
- 12) Maranto, C., Bruscia, K., "Appendix A", *Temple University Studies on Music Education, Volume two, Methods of Teaching and Training the Music Therapist*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1988, p.61.
- 13) NAMT の会長 : Unkefer (1961-1963), Braswell (1971-1974), Decuir (1986-1987), Maranto (1988-1989), Hanser (1992-1993)  
AAMT の会長 : Bruscia (1980-1982), Briggs (1987-1989)

AMTA の会長：Wheeler (2008-2009)

- 14) Bruscia, K., "Professional Identity Issues in Music Therapy Education", *Temple University Studies on Music Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, 1987, p.17.
- 15) Ibid., p.27.
- 16) Darrow, A., & Gibbons, A. C., "Organization and Administration of Music Therapy Practica: A Procedural Guide" *Temple University Studies on Music Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1987, p.110
- 17) Stephans, G., "The Experiential Music Therapy Group as a Method of Training and Supervision", *Temple University Studies on Music Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1987, p.170.
- 18) リラックスした状態で音楽を聴きながら、思い浮かべたイメージをセラピストのサポートを受けながら深層心理を探っていく音楽療法。別称、Bonny Method。
- 19) Gfeller (1995) は、NAMT が「行動主義的または医学的な理論モデルの科学的実験により音楽療法を証明しようとした」のに対し、AAMT は「専門職のアイデンティティと信用を確立するための手段として、臨床方法を発展させ普及させようとした」と指摘している。
- 20) Maranto, C. D. & Bruscia, K., "Reflections", *Temple University Studies on Music Education: Volume two, Methods of Teaching and Training the Music Therapist*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1988, p.60.
- 21) Scartelli, J., "Accreditation and Approval Standards for Music Therapy Education", *Temple University Studies on Music Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1987, p.37.
- 22) Ibid.
- 23) Bruscia, K., "Variations in Clinical Training: AAMT and NAMT Models", *Temple University Studies on Music Education, volume one, Perspective on Music Therapy Education and Training*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1987, p.105.
- 24) Ibid.
- 25) Ibid.
- 26) Bruscia, "Professional Identity Issues in Music Therapy Education", op. cit., p.28.
- 27) Maranto & Bruscia, op. cit., 1988, p.59.
- 28) Ibid., p.52.
- 29) Ibid.

American Association for Music Therapy, *Expanding the Get Way to Music Therapy The 10th Anniversary Conference of the American Association for Music Therapy*, 2008.

Boxberger, R., "A Historical Study of the National Association for Music Therapy", Ph. D. dissertation, University of Kansas, 1963.

Alley, J. M., "Competency based evaluation of a music therapy curriculum", *Journal of Music Therapy*, Vol. 11, 1978, pp.9-14.

Braswell, C., Maranto, C.D., Decuir, A., "A survey of clinical practice in music therapy, Part I: The institutions in which music therapist's work and personal data", *Journal of Music Therapy*, Vol. 16, 1979a, pp.2-16.

Braswell, C., Maranto, C.D., Decuir, A., "A survey of clinical practice in music therapy, Part II: Clinical Practice, education, and clinical training", *Journal of Music Therapy*, Vol. 16, 1979b, pp.50-69.

Braswell, C., Maranto, C.D., Decuir, A., "Ratings of entry skills by music therapy clinicians, educators, and interns", *Journal of Music Therapy*, Vol. 17, 1980, pp.133-147.

Braswell, J. A., "COMPETENCY-BASED MUSIC CURRICULA IN HIGHER EDUCATION" Ph. D. dissertation, The University of Oklahoma, 1980.

Brooks, D., "A History of Music Therapy Journal Articles Published in the English Language", *Journal of Music Therapy*, Vol. 40, 2003, pp.151-168.

Bruscia, K., Hesser, B., and Boxill, E., "Essential competencies for the practice of music therapy", *Music Therapy*, Vol. 1, 1981, pp.43-44.

Bruscia, K., "The Content of Music Therapy Education at Undergraduate and Graduate Levels", *Music Therapy Perspective*, 1989, p.83.

Bruscia, K., *Defining Music Therapy* second edition, Barcelona Publishers, 1998.

ブルーシア, K./生野里花訳『音楽療法を定義する』東海大学出版会, 2001.

Bruscia, K., *Improvisational Models of Music Therapy*, Charles C Thomas, 1987.

グレゴリー, D./藤原志帆, 高田艶子, 曹念慈, 吉富功修訳「音楽療法における行動的な研究デザインの40年間: Journal of Music Therapyに掲載された論文の内容分析」『広島大学大学院教育学研究紀要音楽文化教育学研究紀要』第14巻, 2004, pp.197-206。

Gfeller, K., "Status of Music Therapy Research", *Music Therapy Research Quantitative and Qualitative Perspective*. Barcelona Publishers, 1995, pp.29-64.

羽石英里「〈第3回学術大会 公開討論会「音楽療法士の専門性を考える」〉「職業的」な能力をめぐって」『日本音楽療法学会誌』第4巻第1号, 2004, pp.26-31。

Jenson, K. L., McKinney, C.H., "Undergraduate Music Therapy Education and Training: Current Status and Proposals for the Future", *Journal of Music Therapy*, Vol. 27, No. 1, 1990, pp.158-178.

Kenny, C. B.(Eds.) *Listening, Playing, Creating: Essays on the Power of Sound*, State University of New York Press, 1995.

国立音楽大学音楽研究所音楽療法部門編著『音楽療法の現在』人間と歴史社, 2007。

Maranto, D. C., Bruscia, K., *Temple University Studies on Music Education: Volume one Perspective on Music Therapy Education and Training*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1987.

Maranto, D. C., Bruscia, K., *Temple University Studies on Music Education: Volume two, Methods of Teaching and Training the Music Therapist*, Temple University Esther Boyer College of Music, 1988.

村井靖児『音楽療法の基礎』音楽之友社, 1995。

岡崎香奈「米国での音楽療法事情」『心療内科』第6巻(2), 2002, pp.103-107。

Robbins, C., *A Journey into Creative Music Therapy*, Barcelona Publishers, 2005.

岡崎香奈, 阪上正巳, 井上勢津, 中野万里子, 屋部操, 羽田喜子「音楽療法の教育システムに関する研究(中間報告)」『国立音楽大学音楽研究所年報』第19集, 2005, pp.19-46。

ロビンズ, C./生野里花訳『音楽する人間ノードフォーロビンズ創造的音楽療法への遙かな旅』春秋社, 2007。

阪上正巳「「臨床音楽学」の可能性—音楽療法の基礎学として—」『国立音楽大学音楽研究所年報』第18集, 2004, pp.1-22。

阪上正巳「音楽療法の世界的展望とわが国の課題」『日本芸術療法学会』Vol. 37, No. 1, 2, 2006, pp.7-29。

阪上正巳, 岡崎香奈, 井上勢津, 中野万里子, 屋部操, 羽田喜子「音楽療法の教育システムに関する研究(最終報告)」『国立音楽大学音楽研究所年報』第20集, 2006, pp.21-48。

Solomon, A., "A Historical Study of the National Association for Music Therapy 1960-1980", Ph.D. dissertation, University of Kansas, 1985.

筒井末春「音楽療法の歴史と発展: 心療内科の立場から」『心身医学』第42巻(12), 2002, pp.802-807。

Wheeler, L.(Eds.), *Music Therapy Research Quantitative and Qualitative Perspective*, Barcelona Publishers, 1995.

Wheeler, L.(Eds.), *Music Therapy Research* (Scand edition), Barcelona Publishers, 2005.